

全体目標

がんによる死亡者の減少
(75歳未満の年齢調整死亡率の20%減少)

すべてのがん患者及びその家族の苦痛の軽減並びに療養生活の質の維持向上

がんになってからも安心して暮らせる社会の構築

部会が担当する分野の課題と目標

【目標】がん患者さんやその家族ががん相談を希望すれば、いつでもどこでも質の高いがん情報の提供や相談が受けられ、よりよい治療法及び療養場所を選択することができる。

中期目標:2015年3月までに県民の50%が相談窓口を知っていて、その8割ががんの悩みを解決でき、相談窓口での対応に満足している。

指標: ①相談窓口認知度、②患者満足度
測定方法:患者満足度調査、拠点・支援病院がん相談件数の合算、分析

最終目標:2018年3月までに県民の80%が相談窓口を知っていてその8割ががんの悩みを解決でき、質の揃ったがん相談員が拠点病院、支援病院に配置されている。

指標: ①相談窓口認知度、②患者満足度
測定方法:患者満足度調査、拠点・支援病院がん相談件数の合算、分析

施策毎のアウトカム目標

【アウトカム1】

2015年3月までに県民全体の50%が相談できる場を知っていて、希望した時にいつでも利用できる。
(必要な情報や相談場所にアクセスできる)

【アウトカム2】

その地域に不足している資源や課題が明らかになり、相談員間で質の揃った対応が可能となる。
(相談支援に関してフィードバックを得る体制が整備されが相談の質向上に還元できる)

【アウトカム3】

インフォームド・コンセントが行われる体制と、患者目らが治療内容や治療法を確認し選択できる環境が整備される。

施策毎のアウトプット目標

【アウトプット1】地域の療養情報を集約し医療機関間およびがん患者間で共有できる。

【アウトプット2】がん患者と家族に県内の相談支援センターが周知される。

【アウトプット3】ピアサポーターやがん患者団体等との連携協力体制を構築される。

【アウトプット4】産業保健関連職種との連携のもと、就業支援が提供できる。

【アウトプット5】患者家族満足度調査を実施することができ、相談支援センターの課題が抽出できる

【アウトプット6】県内のがん相談の傾向が計測できる。

【アウトプット7】がん相談支援に携わる者に対する教育研修の場を提供し支援サービスが向上する。

【アウトプット8】2014年作成の「小児がんマニユアル」が共有され、支援の質が担保される。

【アウトプット9】活動に関するフィードバックや他県の取り組み等の情報を収集し県内で共有できる。

【アウトプット10】セカンドオピニオンの普及と活用のための課題がわかる。

【アウトプット11】地域の医療機関および医療従事者に関する情報が共有できる。

施策アクションプラン

【施策1】「地域の療養情報」2015年版」配布後の評価を行い、2016年版を作成・発行する。

【施策2】2016年3月までにチラシ配布やラジオ番組の参加を行う。

【施策3】患者サロンの情報交換会を開催する。

【施策4】就労支援に関する事例に關して、社会保険労務士等との研修会を1回以上開催する。

【施策5】相談支援センター認知度調査と満足度調査表を作成する。

【施策6】がん相談集計シートなどを使用し、相談支援センターの相談内容を定期的に部会で報告する。

【施策7】各拠点病院主催で年3回以上、がん相談員を対象とした研修会を開催する。

【施策8】がん相談支援センターの相談マニユアルを作成後の検討を行う。

【施策9】部会委員が相談支援部会の活動実績を学会等で報告する。

【施策10】2014年実施のセカンドオピニオンに関するアンケート結果を分析し、2016年3月までに結果を公開する。

【施策11】県内のがん診療を行っている病院のセカンドオピニオンリストを作成し公開する。

導き出された対策項目

【対策項目1】相談窓口の機能、役割についての情報を患者、市民に知らせる

【対策項目2】相談支援の充実と質の向上

【対策項目3】運営資源の充実化

平成 26 年度 第 4 回沖縄県がん診療連携協議会相談支援部会議事要旨

日 時：平成 27 年 2 月 23 日（木）14：00～16：00

場 所：琉球大学医学部附属病院 3 階がんセンター

出席者：11 名 樋口美智子（那覇市立病院）、高良清健（友愛会ケアプランセンター）、
神谷八重子（沖縄県立中部病院）、望月祥子（ハートライフ病院）、古堅敦子（県立宮古病院）、
宮良久美江（沖縄県立八重山病院）、親川淳（沖縄病院）、上原弘美（沖縄県地域統括相談支
援センター）、石郷岡美穂、増田昌人、大久保礼子（琉球大学医学部附属病院）

欠席者：2 名 仲宗根るみ（北部地区医師会病院）、石嶺彩香（南部医療センター・こども医療センタ
ー）

陪席者：1 名 井上亜紀（琉球大学医学部附属病院）

【報告事項】

1. 平成 26 年度第 3 回沖縄県がん診療連携協議会相談支援部会議事要旨（資料 1）

協議に先立ち、資料 1 に基づき、平成 26 年度第 2 回沖縄県がん診療連携協議会相談支援部会議事要旨
が承認された。

2. がん患者ゆんたく会について（10～12 月）

資料 2-1, 2-2, 2-3 に基づき、10～12 月に各拠点病院にて開催された「沖縄県がん患者ゆんたく会」に
ついて、紙面報告があった。

3. がん相談件数（10～12 月）

資料 3-1, 3-2, 3-3, 3-4 に基づき、樋口部会長より、各拠点病院のがん相談件数（10～12 月）につい
て、紙面報告があった。

4. 地域相談支援フォーラム in 長崎について

資料 4 に基づき、神谷副部会長より、長崎県でのフォーラムの報告があった。1/31, 2/1 の 2 日間開催
され、1/31 に各県の情報交換会とディスカッションを行い、2/1 にグループワークで事例検討が行われ
た。神谷副部会長より、離島の相談（システム）の均一化が必要で、まだまだ全国的にもがん相談支援
センターの周知が行き届いておらずどこに相談に行けばいいのかわからない人が多いこと、渡航費・宿
泊費の負担が大きいのに助成制度があることも周知されていないこと（沖縄県）、パンフレット等が離島
になかなか行き渡らないので国立がんセンターに離島には優先的に配布してもらおうなどのディスカ
ッションがなされたとの報告があった。宮古病院の古堅室長より、離島におけるがん患者の現状として医療の
空白地帯を作らないために、相談支援とか情報提供をどうするかというところで、経済的・地理的・満
パワー不足とか多くのハードルがあることを実感しつつ、成功事例を元にその地域に合った支援活動を
工夫する（ケーブルTV、自治会放送、回覧板）ことが大切であるとの報告があった。大久保委員より、
過去 3 回参加したが、3 年前は部会で集まることが出来ないという県も多かったのに、3 年たって各県か
なり活動が活発になっており、各県の部会の取組みに驚いた。九州全県に部会が出来、まずは研修会を

行うという県が多かったが、鹿児島県では、各がん相談支援センターの総合評価のような取り組みを始めていて、活動が充実してきていると感じたとの報告があった。増田委員より、各各県から5人以上の大人数での参加があり、大変盛況であった。3年前は、遠く離れた星であった沖縄県（の取り組み）に、各県が急速に追いつき追い越してきた部分も多く見られており、「沖縄県、次は何をやるのですか？」と期待感を持たれていた。鹿児島県の奄美大島、長崎県の壱岐市や松浦市など、がん専門病院がない陸の孤島のような地域もあり、沖縄県は恵まれているように感じたので、これらの地域で頑張っている人への広報活動も必要との報告があった。樋口部会長より、国立がんセンターのメンバーが各県の行政の方のグループワーキングに加わり、かなり盛会であったので、各県の行政の参加への期待と、県指定の拠点病院の参加があったことが収穫であったとの報告があった。

5. 各部会事業の進捗報告について

(1) 【施策1 関連】地域の療養情報第5版について

大久保委員より、今年度は、沖縄県の方で自転修正するとのことだったので、部会やWGは新たな情報の編集協力に関わってきたとの報告があった。県から入札で印刷業者が決まり印刷へ向けて進んでいること、今までの第何版の表記については、第〇版ではなく発行の年度に2015年度版となること、表紙も薄いグリーンに決まったことが報告され、3月末に県及び3拠点病院に納品で例年通りの配布数となり各病院には4月以降随時発送されることも周知された。増田委員より、次年度は県と調整中ではあるがサポートブック作成の予算は確保できそうであることも周知された。

(2) 【施策2】がん相談支援センターの広報について（新聞広告）

資料5に基づき、大久保委員より、部会事務局より新聞無料広告欄への投稿（週刊ホームプラザ、週刊レキオ）を行っており、次年度も継続して広告を行う予定であるとの報告があった。石郷岡委員より、最近院外からの相談が増えており、聞き取りでも新聞やインターネットで知ったとの声をいただくようになったとの情報提供があった。増田委員より、文字数制限があるが、記載中の病院の患者さん以外も無料で相談できることを、広告内容に盛り込んでほしいとの意見があった。樋口部会長より、市町村の広報誌などに「がん相談支援センター」を載せてもらうように働きかけてはどうか？との意見もあった。

(3) 【施策3】2/14 がん患者サロン連絡会について

資料6に基づき、大久保委員より、2/14に患者会合同企画と共同でがん患者サロン連絡会を開催したとの報告があった。患者会合同企画は、上原委員がピアナースとして世話役に関わって企画され、がん患者サロン連絡会は、3拠点病院のMSWと患者会4団体の世話役の方とで総勢20名程の参加があった。患者会の世話役の方からは、患者会同士の情報を知った方がいいので、今後このような機会を作ってもらえたら是非参加しますとの声をいただいた。まずは、サロン同士の連絡会という小さなところから、3拠点病院が中心となって進められたらと考えているので、次年度部会の担当者と相談していききたいとの報告があった。上原委員より、患者会合同企画について県立宮古病院勤務の島尻章子氏（ピアナース）の「治療と仕事の両立」の講演、琉大病院地域医療部金城隆展氏の「患者力を身につけよう」の講演、参加した患者会の方から各患者会の紹介をしていただいた。参加者は43名程であったが、宮古病院のナースの方や医師の参加もあって盛況であった。アンケートの結果、講演会が終わった後に相談会・交流

会をして患者会の交流を深めることも考えたいとの報告があった。がんサロンネットワークとしての開催であったが、サロンから離れて話が膨らんだ部分があり、趣旨がずれていた方もいたので、次回からは趣旨を理解した上での参加をしていただくよう図りたいとの報告があった。

(4) 【施策 6】がん相談員実務者研修について (10/30 中部病院)

資料 7 に基づき、神谷副部長より、10 月 30 日に中部病院にて第 3 回がん相談員実務者研修会を行ったことが報告された。「在宅医療の現状と課題」をテーマに、現状で中部病院の地域医療課で行っている在宅ターミナルで、患者さんを家に帰している現状があるがこれでいいのか、在宅医療の話を聞くことで相談員の立場に活かしていけないのかについてを課題にした。講師として連携している訪問看護ステーションの下地節子所長をお招きし、中部病院MSWの喜舎場理恵さん、中部病院地域ケア科の田仲齊先生とそれぞれのお立場から地域のことについての講演いただき、参加者人数も 52 名と多く参加者の反応も良かったが、在宅へ繋ぐ講話の際の時間設定がまずかったことが反省点であるとの報告があった。

(5) 【施策 7】沖縄県がん相談支援マニュアル (小児がん対応用 第 1 版) について

資料 8 に基づき、石郷岡副部長より、進捗状況の報告があった。小児がんマニュアルの普及がどこまでできているか、地元密着に留意した情報にしたのでそれらの使い勝手を評価するためにWGでアンケート調査を行い、保健所・市町村役場・小児科診療病院・養護教諭を対象に 300 部程度配布している。昨日 (18 日) が〆切で現在回収中であり、今後集計して、部会やどこかの学会で報告の予定である。これまでのWGは、今年度でいったん終了とし、自転修正など次年度のWGについては部会で検討して頂きたいとの報告があった。

(6) 【施策 9】セカンドオピニオン・アンケートについて

大久保委員より、11 月下旬に、沖縄県内 34 病院施設に勤務する医師にアンケート調査表を配布し、600 弱の回答を得ているので、取りまとめが出来次第報告書にまとめ、部会での報告・協力機関への送付・協議会HPへのUPを行い、内容に関しては部会の皆さんへも相談させていただいて学会への報告まで行う予定であるとの報告があった。

6. その他

(1) 第 4 回 がん診療連携協議会の報告について

石郷岡委員より、協議会でのがんサポートハンドブックに関して報告があり、天野委員から、「がんサポートハンドブックが医師からきちんと配られているか検証してほしい」との意見が出、これについては部会で何らかのアクションを起こしていかなければならないのではないかとの提案があった。また、ハンドブックにがん条例を載せてはどうか、離島でのハンドブックの研修会が大変良かったとの意見があったことも報告された。

(2) 島根県がん対策推進協議会での講演について

増田委員より、島根県はがん対策において行政側が主導で健闘している県であり、講演の中で、サポートブックの配布方法や配布後の効果やメリットについての質問があったので、アンケートは 100 枚程度回収出来たが配布の効果についてはきちんと検証するには至ってないと回答したとの報告があった。

医師がなぜ配らないかの問いには、面倒くさい、慣れていないからなどの声があるので、医師の診療テーブルの上に置き手渡ししやすいようにする、外来の受付の看護師さんから配布する、退院時に渡す、入院案内（説明）の時に渡す、入院時の病棟に上って来た時に渡すなどの意見交換があり、今後、配布後の効果についての検証が必要との協議がなされた。

【協議事項】

1. 平成 26 年度の部会事業の評価について

資料 9 に基づき、大久保委員より報告があり、地域の療養情報がんサポートハンドブック第 4 版の配布と普及活動・2015 年版の作成・相談センターの広報活動（ラジオ番組・新聞広告）・ピアサポーターとの連携による小児がんサバイバーのネットワーク作り・相談員研修会（3 拠点病院）・小児がん相談マニュアルの作成及び配布・部会活動の学会報告・セカンドオピニオンリスト作成及びHP公開などの施策は評価 10 点とし、患者家族満足度調査の実施（予備調査：認知度調査の実施）・セカンドオピニオンの普及と活用（アンケート調査の実施）の施策は評価 7 点とし、相談内容の分析（次年度は宮古、八重山もご参加願う）の施策は評価 6 点、産業保健関連職種との連携推進（がん患者の就労支援）の施策は評価 4 点とすることが、協議の上了承された。

望月委員より、就労支援の冊子（県作成）が県に回収されず、院内に大量に保管されたままになっているがどうしたらよいかとの質問があった。増田委員より、回収してしかるべき所に配布し直した方がいいので、県保健医療政策課の兼城さんに直接問い合わせるとの回答があった。

2. 平成 27 年度の部会事業の行動計画について

資料 10 に基づき、大久保委員より、最近よく言われている PDCA サイクルやロジックモデルの見直しのがん政策部会でも言われているので、5 年計画も丸 3 年経ったので見直しを行い、アウトカム 1～3 の内、アウトカム 1 「必要な情報や相談場所にアクセスできる」、アウトカム 2 「相談者からのフィードバックを得る体制が整備されがん相談の質向上に還元できる」のように変更してロジックモデルを修正していくとの報告があった。増田委員より、ロジックモデルから、意思決定のモデルに変更していった方がよいとの意見もあった。

3. 平成 27 年度の部会事業の予算について・・・

大久保委員より、資料 11-1, 11-2 に基づき予算を計上しており、アンケート調査の郵送費や研修会の講師派遣費などの経費の試算案で、資料 11-1 は部会全体、資料 11-2 は 3 拠点 3 支援病院での内訳表となっているとの報告があり了承された。

4. 【施策 6】地域相談支援フォーラムの開催について

大久保委員より、平成 27 年度の相談員対象の企画は鹿児島県部会と大阪府部会が採択され 12 月か 1 月の開催予定、一般対象の企画は福岡県九州がんセンター（5 月の博多ドンタクの頃）と三重県協議会が採択されたとの報告があった。増田委員より、国立がんセンターの若尾先生からも沖縄県から平成 28 年度以降の企画に応募してほしいとの要望があったとの情報提供があった。

沖縄県での開催について、運営をどうするか・組織づくりをどうするか・平成28年度に手を挙げるなら早めに動き出す→4月5月の相談支援部会や協議会での決定・拠点病院以外の各病院で外部への協力への理解が得られるのか・相談支援部会委員は全て実行委員になってもらうことが必須・県内全国規模の大きな学会や研修会などの情報収集など、部会員から多数の意見があったが、まず、神谷副部会長から長崎県内の実行委員数やスケジュール表を事務局に提出していただき、部会員内で共有して、4月の平成27年度第1回相談支援部会で検討することが了承された。

5. 次回、平成26年度第4回相談支援部会開催日について

第1候補日：平成27年4月16日（木）

第2候補日：平成27年4月30日（木）

6. その他

(1) 全国がん患者体験調査について

樋口部会長より、国立がん研究センターからの依頼で、全国がん患者体験調査が琉大病院、那覇市立病院、中部病院の1県拠点・2地域拠点病院で行われているとの情報提供があった。

(2) がん相談支援センター相談員研修会受講に関する要望書に対する回答について

増田委員より、11月の協議会にて意見が出された、離島などの支援病院での相談員研修の研修体制等の整備への要望書を国立がん研究センターへ提出しており、別紙資料の通り回答が得られたとの報告があった。内容については、研修希望者に対しては厚生労働省と相談し県に対して新規拠点病院の申請予定の情報収集などの対策を検討、基礎研修(1)(2)はeラーニングで学習コンテンツを提供、平成27年度から認定がん専門相談員の認定事業を開始し、有償で受講できる認定コースの設定となっているとのことであった。

古堅委員より宮古病院は誰一人研修を受けていない状況なのでeラーニングで受講する予定、宮良委員より八重山病院は基礎研修(1)(2)の受講修了者が基礎研修3の申し込み中であるとの報告があった。

(3) 平成27年度の相談支援部会委員の選定について

樋口部会長より、県MSW協会への研修会・サポートハンドブック配布などの情報提供は行っているが、部会活動までは知られていない状況であるとの報告があった。協議の中で、保健所の保健師の方（OBの方含む）、訪問看護の方の推薦や、各病院での部会員の新旧交代などがあり、次年度へ向けて調整していくことで了承された。

[TOP](#) > [がん相談支援センター](#) > [企画公募型フォーラム・ワークショップ](#) > 平成26年度 地域相談支援フォーラム in 長崎 開催記録(1日目)

平成26年度 地域相談支援フォーラム in 長崎 開催記録(1日目)

「がん相談支援“他県の取り組みに学ぼう”(情報交換会)」

更新日:2015年04月08日 [[更新履歴](#)] 掲載日:2015年04月08日

[■プログラム](#) [■概要](#) [■資料](#)

■プログラム

平成27年1月31日(土)13:00～17:00 場所:長崎大学病院 第4講義室
全体テーマ「つなげよう!がん相談支援の輪」

(1日目) テーマ「がん相談支援“他県の取り組みに学ぼう”(情報交換会)」
開会あいさつ
各県からの報告
グループワーク・全体共有
講評

■概要

長崎県がん診療連携協議会 相談支援ワーキンググループ他主催によって開催されたフォーラム「つなげよう!がん相談支援の輪」は、九州・沖縄8県の相談員を対象として平成27年1月31日(土)、翌2月1日(日)に長崎大学病院にて開催され、各日約130人のがん相談支援に携わる相談員に加え、長崎県内外の医師7人、自治体のがん対策主管課担当者6人、患者団体のオブザーバー4人が参加しました。(企画公募型の地域ブロックフォーラムとしては九州・沖縄地区での初開催ですが、関連8県のがん専門相談員の合同研修会は、平成24年12月に熊本で開催された地域相談支援フォーラムを含め、今回で3度目となります)。平成26年2月に福岡で開催された地域相談支援フォーラムでは、当時の実行委員間で関連8県の相談支援部会の活動報告が行われ「極めて有意義な内容であり、実行委員にとどめずより多くのがん専門相談員に聞いてもらおうとよい」との声が多かったことから、今回の長崎でのフォーラムでも、参加者各自が隣県の相談支援センターの活動から学ぶ機会を1日目に設けることになりました。

当日は「がん相談支援“他県の取り組みに学ぼう”(情報交換会)」のテーマで、玉城結さん(諫早総合病院)の総合司会のもと、主催者である若尾文彦



センター長(国立がん研究センターがん対策情報センター)と芦澤和人幹事長(長崎県がん診療連携協議会)の開会のあいさつで始まりました。

若尾センター長からは、平成18年にがん診療連携拠点病院整備指針において、相談支援センターが明記されて9年がたつが、世論調査の結果を見てもまだまだ知らないという人が多くいること、がん相談をどのように知ってもらい、どのように利用してもらうか、九州・沖縄の仲間たちと考える機会にしたいとあいさつが述べられました。



続いて芦澤幹事長からは、開催地である長崎らしさを出すために、県内外の実行委員で今日まで準備をしてきたフォーラムであること、参加者みんなで長崎に来てよかったといえるフォーラムにしたいとあいさつが述べられました。



<各県からの報告>

最初のプログラムは中島誠司さん(長崎原爆病院)、久永佳弘さん(南九州病院)が座長を務め、この1年間のがん相談に関する新たな取り組み、そして長崎フォーラム2日目のテーマ「離島・がん医療空白地域の現状を知ろう～相談者を支えるネットワークづくり いま私たちができること～」につなげるために、各県の離島・がん空白地域におけるがん診療と相談支援体制の現状と課題について、九州・沖縄8県の相談員、行政担当者から報告されました。(各県資料をご参照ください)



長崎県 発表資料([PDF:348KB](#))

発表者:手水真理子さん(長崎みなとメディカルセンター)
大隈輝美さん(長崎県医療政策課)



長崎県がん診療連携協議会にある7つのワーキンググループ(WG)の1つである相談支援ワーキンググループでの取り組みとして、特に広報活動について紹介されました。年に2回のがん相談員研修会開催や、平成26年3月に同WG、県、長崎市立図書館のコラボレーションで「がんと向き合うサポートブックながさきーあなたに伝えたいこと」を発行したこと、また、県と長崎市立図書館、拠点病院の共同で同図書館に「がん情報コーナー」を設置し、館内で定期的開催している講演会、相談会に拠点病院の相談員が積極的に協力していることが紹介さ

れました。

大分県 発表資料([PDF:307KB](#))

発表者:井口桜子さん(済生会日田病院)
嶋川由紀さん(大分大学医学部附属病院)
梶原清司さん(大分県福祉保健部健康対策課)



大分県がん診療連携協議会情報提供・相談支援専門部会のもとに、「がん相談支援センター実務者情報交換会」が年3回開催されているとのことでした。実務者情報交換会では、相談者からのフィードバック体制づくり、患者団体との連携、相談の質の向上、広報・周知活動などの課題を抽出して議論し、今後の具体的な取り組みを計画していることや、大分県健康対策課と協働し、地域のがんサポートブックの作成、がん患者の就労支援についての検討をしていることが紹介されました。

佐賀県 発表資料([PDF:922KB](#))

発表者:石丸浩美さん(佐賀大学医学部附属病院)
大石美穂さん(佐賀県医療センター好生館)
田島祥嗣さん(佐賀県健康福祉本部健康増進課)



佐賀県がん診療連携協議会に位置づけられた相談支援センター連絡会では、年に4回の連絡会と研修会、年1回、多職種を含めた研修会を計画していると紹介されました。また、連絡会で内規を作成し、会の位置づけの意識統一と、活動の維持向上を図っていると述べられました。がん相談支援センターの広報・周知において行政と連携し、県が作成するチラシや広報誌で、積極的にがん相談支援センターの紹介を掲載している取り組みが紹介されました。

熊本県 発表資料([PDF:351KB](#))

発表者:片山佳代さん(熊本市民病院)
藤本真之介さん(熊本県健康福祉部健康づくり推進課)



熊本県がん診療連携協議会がん専門相談員ワーキンググループでは、平成26年5月から3グループを編成して、研修企画と運営、療養ハンドブックの作成、そして広報・周知活動に取り組んでいることが紹介されました。また県内のがん相談支援センターへのアンケートから明確になった、就労支援や希少がんなどの情報提供に、相談員が困難を感じている状況に対して、行政と連携して情報の集約を行うなどの対策が検討されていると報告されました。

福岡県 発表資料([PDF:651KB](#))

発表者:織田久美子さん(社会保険田川病院)
篠原晋さん(福岡県保健医療介護部健康増進課)

福岡県では平成26年度からの新たな取り組みとして、県全域のがん相談員を対象としてスキルアップを目的とした研修と、県内を4つのブロックに分け、連携業務に携わるSW、看護師等を対象として、地域の関係者の連携強化を目的とした2種類の研修を実施している取り組みが紹介されました。また、平成27年5月の博多どんたく港まつりにおいて、がん相談支援センターを広報するための企画がされていることが報告されました。



沖縄県 発表資料([PDF:606KB](#))

発表者:神谷八重子さん(沖縄県立中部病院)

沖縄県がん診療連携協議会 相談支援部会では、広報・周知活動として、がん検診をテーマにしたラジオ番組へ、医師や行政担当者とともに相談員が出演したこと、新聞2紙に定期投稿してがん相談支援をアピールしていることが報告されました。また症例の少ない小児がんの相談にも対応するために、「おきなわ小児がん相談マニュアル」を作成し、医療機関や市町村や保健所に配布したという取り組みが紹介されました。



鹿児島県 発表資料([PDF:262KB](#))

発表者:野村瑞穂さん(鹿児島大学医学部・歯学部附属病院)

塩屋公子さん(鹿児島県保健福祉部健康増進課)

鹿児島県がん診療連携協議会 相談支援センター部門会では年に2回、部門会を開催し、研修や事例検討を行う際、企画を持ち回りで担当することで、各病院が主体的に取り組んだ活動が行われていることが紹介されました。また、PDCAサイクルを意識し、県内の課題を可視化して、広報・周知、患者サロンの周知・充実、地域との連携強化、多職種とのカンファレンス実施、との大項目ごとに解決に向けた取り組みを行っていることが報告されました。



各県からの発表に続いて行われた50分間のグループワークでは、参加者が12のグループに分かれて、「他県の取り組みに学ぼう」という総合テーマのもと、(1)県レベルでのがん相談員の横のつながり、(2)がん相談支援センターの広報活動、の2つからどちらかのテーマを選び、各グループに分かれて討議を行いました。各グループでは、各自が日々の現場の課題を持ち寄り、各県からの発表から学んだことや、自県での取り組み、新たなアイデアを出し合って活発な議論が交わされました。



全体共有では、まず、12グループのうちでテーマ(1)「がん相談員の横のつながり」を選んだ唯一のグループから、「研修を通じたつながり」を中心とした発表がありました。そこでは、研修会の企画、準備、運営は負担が大きいですが、研修などを定期的に行うことで「顔の

見える相談員のつながり」が少しずつできている。ただ、拠点病院数の多い県や、協議会などの組織が発展して規模が大きくなればなるほど、逆に顔を合わせる関係が減少する、というジレンマも語られました。

これらの解決策として、地域ごとにブロックを形成して、小回りの利く連携をとることで、相談員同士の横のつながりを綿密にすることで、充実したがん相談支援に還元する方法などが紹介されました。



続いて、テーマ(2)「がん相談支援センターの広報活動」を選んで討議したグループから発表があり、会場全体で共有を行いました。多くのグループでは、院外での広報・周知活動の重要性はもちろんであるが、まずは相談員が活動の足場とする院内におけるさまざまな取り組みが大変重要であるという報告されました。

各グループからは、これまでさまざまな院外向けの広報活動を行ってきたが、まだがん相談支援センターの活動が医師、コメディカルスタッフをはじめ、院内スタッフに十分理解されていない、ということが課題としてあげられていました。このことに対する取り組みとして、相談員が相談対応をしたあとにどのように経過したかについて院内スタッフにフィードバックすることでがん相談支援センターの活動の「見える化」をしていくこと、多職種が集まる会議や事例検討会の場を通して活動を周知していくこと、これまでにあまり連携がとれていなかった部署やセクションに対して、重点的に周知活動を行うことや新人教育や研修会など教育の場を通してがん相談支援センターの役割を伝えていくことなどの活動があげられました。

患者さん、ご家族に対する広報・周知活動として、掲示板やポスターを利用してすでに周知がなされているものの、病院内の掲示板は、さまざまな情報であふれかえっているため、その中に埋もれないよう、視覚的に「目につく」ポスターやリーフレットを置くこと、また置く場所についても、化学療法室や放射線治療の待合など、ゆっくり手にとって見ることのできる場所を吟味して工夫することが必要であると報告されました。その他、各病床の床頭台のテレビで、がん相談支援センターを紹介するビデオの放映や、医師から患者さん、ご家族へ「紹介カード」を用いて積極的にがん相談支援センターの利用をアピールしてもらうなど、「要となるスタッフの協力を得る」取り組みも紹介されました。



さらに、前半の各県からの報告において長崎県から紹介された、公共図書館でがんの講演会を行うといった公共図書館とがん相談支援センターとの連携の取り組みについて、いくつかのグループから自県でもぜひ連携を模索したい、という声が聴かれました。

これまでの九州・沖縄ブロックの地域相談支援フォーラムにおいても、がん相談支援センターの広報・周知について議論され、各施設、各県で数多くの取り組みがなされてきましたが、一朝一夕に進むものではなく、今回の全体共有であげられた取り組みを、さらにコツコツと、そして地道に進めていくことが重要であることが会場全体で確認され、グループワークと全体共有が終了しました。

このあと、若尾文彦センター長から、長崎フォーラム1日目の講評があり、今日の各県からの報

告とグループワーク、全体共有を通した学びを持ち帰って、さらに各県で共有してがん相談支援のPDCAサイクルを回すこと、特に行っている取り組みのチェックを意識して進めてほしいこと、さまざまな課題の施設ごとの取り組みや県単位での取り組みについては、行政担当者とも協働して進めてほしいこと、そしてこの長崎フォーラム以降の取り組みを、本年11月に開催予定の鹿児島フォーラムで共有できることを楽しみにしていると述べられました。

また、高山智子部長(国立がん研究センターがん対策情報センターがん情報提供研究部)は、平成24年、25年度の九州・沖縄ブロック地域相談支援フォーラムから、今回の長崎フォーラムへと続く経過をふまえ、がん相談支援センターの現場の相談員と、行政担当者が一体となって連携をとり、協力し合っ、各県のがん相談支援を発展させてきたことを発表で何うことができ大変うれしく思っていること、またこれをさらに九州・沖縄ブロックとして発展させていってほしい旨が述べました。



続けて、高山部長からお知らせとして、がん相談支援の質のさらなる担保のために、平成27年度から更新される国立がん研究センターがん対策情報センターが提供する相談員研修の概略と、認定がん専門相談員認定事業、認定がん相談支援センター認定事業などが紹介され、九州・沖縄ブロック地域相談支援フォーラム in 長崎の1日目が終了しました。

■ 資料

- ・長崎県 発表資料([PDF:348KB](#))
- ・大分県 発表資料([PDF:307KB](#))
- ・佐賀県 発表資料([PDF:922KB](#))
- ・熊本県 発表資料([PDF:351KB](#))
- ・福岡県 発表資料([PDF:651KB](#))
- ・沖縄県 発表資料([PDF:606KB](#))
- ・鹿児島県 発表資料([PDF:262KB](#))

◀ [平成26年度 地域相談支援フォーラム in 長崎 開催記録](#)

[平成26年度 地域相談支援フォーラム in 長崎 開催記録\(2日目\)](#) ▶

[TOP](#) > [がん相談支援センター](#) > [企画公募型フォーラム・ワークショップ](#) > 平成26年度 地域相談支援フォーラム
in 長崎 開催記録(2日目)

平成26年度 地域相談支援フォーラム in 長崎 開催記録(2日目)

「離島・がん医療空白地域の現状を知ろう～相談者を支えるネットワークづくり いま私たちができること～」

更新日:2015年04月08日 [[更新履歴](#)] 掲載日:2015年04月08日

[■プログラム](#) [■概要](#) [■資料](#)

■プログラム

平成27年2月1日(日)9:00～12:30 場所:長崎大学病院 第4講義室
全体テーマ「つなげよう!がん相談支援の輪」

(2日目) テーマ「離島・がん医療空白地域の現状を知ろう～相談者を支えるネットワークづくり
いま私たちができること～」
離島の現状報告
グループワーク、全体共有
講評
閉会あいさつ

■概要

続く2日目、2月1日(日)は、116人の相談員が参加し朝9時に開始されました。司会・進行を務める安藤真紀さん(長崎大学病院)のあいさつのあと、「離島・がん医療空白地帯の現状を知ろう 相談者を支えるネットワークづくり いま私たちにできること」題して5人の発表者の報告に入りました。

まず、座長の宮川江利さん(長崎みなとメディカルセンター)、竹山由子さん(九州がんセンター)の下、宮川さんから「九州・沖縄ブロックには離島などまだまだ社会資源の少ない地域が存在している。がんと診断されたとき拠点病院が近くにないという状況がある。こうした中で、治療のための転院や治療が終わったときの連携のために、患者・家族が困らないように議論していきたいこと、どのよう

な支援が必要か5人の発表者から学び、参加者とグループワークで深めていきたい」と、実行委員会でこのテーマが検討され選ばれた経緯と2日目の報告とディスカッションの趣旨が説明されました。



最初にごん専門相談員の立場から、屋(おく)ます江さん(鹿児島県立大島病院)が「離島におけるがん患者の現状とがん専門相談員としての課題」と題して発表されました。

鹿児島県立大島病院がある奄美大島は鹿児島から南へ400kmの洋上に位置し、有人8島からなる奄美群島は12市町村、人口約11万人が生活している。

国が指定した地域がん診療連携拠点病院である鹿児島県立大島病院の医療圏は8島におよび、圏内の医療資源は、15病院と診療所が96施設、在宅療養を支援する施設は、在宅療養支援診療所が24カ所、在宅療養支援病院が4施設存在するとのことでした。



平成18年から25年までの院内がん登録のデータから、鹿児島県立大島病院で治療を受けたがん患者は2,028人で、がん相談支援センターでは医療費、退院支援や在宅医療についても相談が増えており、この背景として、高齢独居世帯が多く、医療依存度も高いこと、家族が住む県外の大病院で手術を受け、術後の化学療法や緩和ケアのために鹿児島県立大島病院へ転入院するケースや、周囲にごんを知られたくないために長期入院を希望する場合もあるとのことでした。

島を離れてがんの治療を受けたい、また、がんの治療後に島に戻ってきたい、という離島特有の相談には、日頃から信頼できる「かかりつけ医」を持って相談することや、適切に診療情報提供書を書いてもらうことなど、相談者が具体的な行動がとれるよう支援していることが報告されました。

屋さんは、離島の現状として、受診にあたり地理的な問題や交通機関が整備されていないこと、離島が多く医師の不在や緩和ケア病棟がないこと、がん相談支援センターの認知度が低く相談に結びついていないことなどの問題点を提示し、これらの問題点に対し、住民へのがんに関する知識の普及、がん相談支援センターを周知し相談しやすい環境作りを行っていき、創意工夫をして参加しやすい患者サロンを作っていくという取り組みなど、地域の支援者との連携を強めることで、がんになっても住み慣れた奄美で生活できる環境を作っていきたいことが述べられました。

続いて、松本泰行さん(壱岐市民病院)は、地域医療連携室で勤務する看護師の立場から「離島がん医療の実際」と題して報告されました。

壱岐市民病院がある壱岐島は、福岡から高速船で約1時間、北西に約60kmの洋上に位置し、島には約27,000人が生活し、高齢化率は31%を超えているとのことでした。壱岐島の医療資源としては、6病院、診療所が18施設、訪問看護が2施設存在している現状を述べら



れました。

壱岐市民病院は、長崎県が指定した『がん診療離島中核病院』であり、現状として外科医が不在なため、島外で手術、放射線治療、がん化学療法を受けたあとの受け入れを行い、がん相談支援に関しては、外来、病棟、地域連携室の職員がそれぞれ対応されていることが報告されました。

平成26年の壱岐市民病院におけるがん患者は282人で、がん種は、前立腺がん、乳がん、肝臓がん、胃がん、肺がんの順で多く、松本さんが所属される地域医療連携室を經由して、壱岐市民病院から他院への転院、他院から壱岐市民病院へ入院された患者さんは1年間に147人、そのうちの約30%弱、40人の方ががんの診断を受けてお

られ、他院への転院が19人、他院からの入院が21人だったと報告されました。

平成26年度に、外来で化学療法を受けられた患者さんは、前立腺がんの方を除いて24人で、がん種では肺がん、乳がん、大腸がんの順となっていました。

島外でのがん治療のための他院紹介先、逆に島外から壱岐市民病院への紹介元の現状を見ると、約90%は福岡県内の医療機関となっており、同じ長崎県内の移動よりも交通の便がよく、家族が住んでいることも多い、という背景があると述べられました。

これらの現状から浮かび上がる課題に対して、平成27年4月から外科医が常勤となり壱岐市民病院での手術が検討されていることや、ソーシャルワーカーを採用してこれまで以上の相談支援体制の整備を準備していること、抗がん剤のミキシング室を新設するとともに、外来に化学療法専門ブースを設置して、抗がん剤治療の環境整備を進めていることなど、がん診療体制の充実に向けて計画が進められていることが述べられました。

屋さんの報告でも触れられたように、「狭い島の中でがんを知られたくない」という思いを持つ患者さんも多いが、離島だから仕方ない、と諦めることなくハード面やスタッフの充実などを含め、小さなことからがん患者さんを支援していきたい、と締めくくられました。

続いて長崎県松浦市の診療所医師、押渕素子さん(押渕医院)は、「がん医療空白地域の現状」と題して発表されました。

押渕医院のある松浦市は、平戸市、佐世保市、佐賀県の唐津市、伊万里市に隣接しており、人口は24,000人、人口減少と高齢化が進む地域で、がん診療連携拠点病院のある佐世保までは自動車でも1時間弱の距離で、高齢のがん患者さんには負担となる距離とのことでした。

押渕医院は、松浦鉄道御厨駅の目の前にある、訪問看護ステーションと短期入所施設を併設する診療所です。訪問看護ステーションでは、これまで自動車でも1時間半という移動時間のために、依頼に対応できていなかった鷹島への訪問を、スタッフの熱意によって、まさに今週開始を決めたところだと話されました。



長崎県内の人口10万人あたりの医師数の現状は275.8人と、全国平均を上まわっているものの、医師は都市部に集中しており、松浦市は87.0人と県内最低であり、松浦市民病院が診療所に転換したことなどから、平成8年から24年までの医師数の減少が顕著であるとのことでした。松浦市の医療資源は、平均61.2歳の医師23人が地域の医療を支えており、病院が3施設、診療所が11施設、訪問看護ステーションは押渕医院併設の1カ所で、救急告示病院、夜間救急診療所がな

いことが紹介されました。

押淵さんは麻酔科を専門ですが、押淵医院勤務後はプライマリケア医として内科外来も担当しているため、高血圧、糖尿病、認知症などさまざまな疾患で受診される患者さんへの対応もあり、がん患者さんだけにゆっくりと時間をとることが難しい現状とのことでした。その日々の診療において、がんを早期に発見し、治療のできる病院に紹介すること、遠方の病院に通院が困難な患者さんの化学療法継続から、緩和ケア、在宅医療、訪問診療、在宅でのみとりやご家族のグリーフケア、そして相談相手としてなど、かかりつけ医として果たすべき役割を担っていると述べられました。

「自宅は最高の個室」と言われるように、自宅でのみとりは理想的であるものの、老老介護などの現状の中で実現は困難なこともあるが、本人の希望を可能なかぎり支援しようと、これまで23人の方を自宅でみとられたとのことで、自動車で50分、船で25分などの地域にも訪問された報告されました。

実際の訪問診療の事例を紹介されたあと、今後の課題として、訪問看護ステーションを24時間対応にすること、そして長崎県の北部において在宅医療の仲間を作ることをあげられ、そのために普段から「顔の見える関係作り」を実践している、と述べられました。また、地域医療のやりがいを若い世代に伝えるために「ながさき県北地域医療教育コンソーシアム:A.G.O netながさき」が立ち上がり、全国から研修医が実習に訪れているとのことでした。

発表の最後に、自分自身がこの地域で働き続けることで、同じ思いを抱く人たちと共に松浦の地域医療を支えていきたい、と述べられました。

続いて、「小離島における在宅ターミナルケアへの取り組み」について、訪問看護ステーション看護師の立場から、出口久美子さん(長崎県看護協会訪問看護ステーション福江)が発表されました。

長崎県の最西端に位置する五島列島は、5つの島を中心に約140の島があるとのことでした。発表は、医療資源と福祉資源の少ない五島列島の小離島に住む、あるターミナル期のがん患者さんについての療養経過と訪問看護活動についての報告がありました。

出口さんの勤務する訪問看護ステーション福江の所在地である福江島は、人口約4万人、高齢化率34%で医療、福祉資源はほぼ整備されているものの、この活動報告のあった小離島は、定期便の本数も少なく、強風や高波など悪天候による欠航も多いとのことでした。また、医療、福祉資源も少なく、無床診療所が1施設で島内に救急車の配置もないとのことでした。そのため急患の場合は、島の波止場まで自家用車を使用し、海上タクシーや漁船で福江港まで搬送、その後、福江島の救急車に連携する必要があるとのことでした。

自宅で最期を迎えたい、と希望するがん患者さんを支えるために、退院後の医療体制は、福江島の中核病院の医師と、小離島の診療所医師が役割分担し、訪問看護は月に一度の頻度での導入が始まり、また、介護体制はケアマネジャーやホームヘルパーが家族と連携しながら支援したと述べられ、病状の変化により、訪問看護の頻度も増え、本人の希望や家族の不安を受け止めながら活動を続けられ、自宅で最期を迎えたいという本人の希望に添った支援がなされたことが報告されました。



本人の意思表示や家族の思いと力、疼痛コントロール、親類や近隣の協力、医療・福祉の連携など、本人の希望を実現できた要因を考察され、さらに行政のサポートとして、五島市小離島地区高齢者支援事業として実施している、小離島高齢者訪問介護船賃負担事業を紹介されました。これは、訪問看護などの利用者が事業者に対して負担する旅客船の船賃を五島市が支給

するものとのことでした。

出口さんは、小離島への訪問看護において重要なこととして、住民の気質を知るなどのネットワーク作り、人と人とのつながり、人間関係の構築をあげられました。また、保健師の訪問などを通して、行政に現状を伝え、支援の協力を得ることが必要であると述べられました。

そして最後は、「がん治療と離島の課題」と題して、当事者の立場から真栄里隆代さん(ゆうかぎの会)が発表されました。沖縄県は国内他県に類を見ない島嶼県であることや、交通網の整備が不十分なこと、また県民所得が低いなどの特徴があることを述べられました。また、真栄里さんの住む沖縄県宮古島市は、沖縄本島からも300Kmの距離に位置する人口約55,000人の島で、過疎化、高齢化、介護力不足があるといった現状が報告されました。



宮古島の医療資源は総合病院が2施設あるものの、がん医療に関する問題点としては、放射線治療ができないこと、骨シンチやPET検査ができないこと、血液がんの専門医が不在であること、島内に緩和ケア病棟がないこと、情報提供・相談支援体制が不十分であることが述べられ、これら地理的背景、社会背景、医療資源などから、離島のがん患者が厳しい状況に置かれていることを報告されました。

次に離島の課題を明らかにするため、「がんになったとき、何に困ったか」「離島のハンディキャップを取り除くには何が必要か」について、平成23年9月に宮古島で市民を対象に実施されたアンケートなどの結果から考察されました。

まず、島の住民の現状として、過疎化、介護力低下という背景が報告され、がんになったとき困ったこととして、気持ちの落ち込み、交通費、宿泊費、治療費など経済的な問題、そして情報支援・相談支援の体制整備の遅れがあげられました。

このうち、情報の入手、検索方法についてはインターネットと本屋がそれぞれ約4割であり、病気を正しく理解するには厳しい現状があると述べられました。

経済的な問題については、がんの治療費に加え、離島ならではの渡航費、そして治療中のホテル、アパートなどの滞在費があげられ、これらの負担軽減のために直接的な支援策の整備が必要であると述べられました。

また、インターネットを活用して、本島まで出向かなくてもセカンドオピニオンが受けられる仕組みや、離島で専門医の治療が受けられるように人的交流を行うなどの仕組みを整備する重要性についても述べられました。

先のアンケート結果のように、正しい情報が入手しにくい離島の現状に対して、相談支援体制を整備することで、正しい情報を提供し、その上で本人・家族が望む医療を選択できるよう支援することが、問題解決の糸口になると示されました。そして体制整備とともに、相談員は相談室の中だけでなく、相談室から外に出て、困っている人たちに積極的に声をかけていくことにも取り組んでほしいと述べられました。

真栄里さんは最後に、「離島だから仕方ない」と、命を諦めないために、「患者に最も近い位置で寄り添い、支援する相談員が頼りです。」というメッセージで発表を締めくくられました。

以上5人の発表のあと、休憩をはさんで、参加者のグループワークに移りました。

座長の竹山さんから、「九州・沖縄ブロックの共通の課題とし

て、離島やがん医療の空白地域があることを考え、がんの治療中、あるいは積極的治療が終了する時期の連携について、そして患者さんやご家族が困らないための情報をどのように提供していけばよいのかについてグループで考えましょう。」とグループワークのテーマの説明がありました。



参加者は12グループに分かれ、50分間のグループワークにおいて、5人の発表を通して考えたこと、そして相談員として日々直面している課題を活発に討議し、全体共有を行いました。



連携体制について討議したグループからは、離島の病院や診療所、訪問看護ステーションなどの機関と情報交換する際の手段として、電話での情報交換や診療情報など文書が中心となり、顔の見えない連携をせざるを得ない現状がある中で、相談員が人と人、機関と機関の間に介在することで積極的に調整をしていく取り組みや、離島から病院に出向いて調整を行う取り組みが報告されました。また、今回のフォーラムのように、がんという疾患を中心に広がりつつあるネットワークをきっかけにして、あらゆる疾患を持った患者さんや家族を支える仕組みを作るために、同じ目的を持った支援

者たちが連帯し、知恵を出し合って考えていく姿勢が重要であるとの報告がされました。

また、情報提供体制については、情報は置いてあるだけでは伝わらないので、情報が整備されるだけでなく、どうやって伝えるかが重要であり、相談員が情報提供の中心的な役割を担う必要があるとの報告や、相談員をはじめ医療者自身がどこにどのような情報があるかをよく把握し、相談支援センターで来所した相談者に提供するだけでなく、出前講座などを企画してアウトリーチしていく取り組みも重要であるとの報告がされました。

また、今回のフォーラムにオブザーバーとして参加した患者会代表からは、「がんの診断を受けた患者は、自分のことで精いっぱいになっており、自ら相談支援センターにつながりにくい状況があることを理解してほしい。相談窓口の存在自体を知らない、また、知っていてもそこでどんなことが相談できるのかについて、積極的に広報して、必要な人に必要な情報が届くように、さらに体制を整備してほしい。」というコメントが述べられ全体共有が終了しました。

このあと、2日間のプログラムを通して、高山智子部長(国立がん研究センターがん対策情報センターがん情報提供研究部)は、「がん医療の空白地域において相談支援にできること、というテーマは、平成26年7月に仙台で開催された地域相談支援フォーラム 東北ブロックにおいても議論されたが、この長崎フォーラムで離島ならではの困難さ、そしてその課題の大きさを知ることができた。相談員が明日からできること、行政ができることを地域の支援者と共に考えることができた意義は大きい。県内だけでなく県境を越えた取り組みをさらに発展させていただきたい。」と講評を述べました。

九州・沖縄ブロックにおいては、平成27年度に鹿児島でフォーラムを開催する準備が進められており、鹿児島県の実行委員から案内があり、次回へバトンが手渡されました。

最後に川崎浩二ワーキンググループ長(長崎県がん診療連携協議会相談支援ワーキンググ

ループ)から、「この2日間、刺激し合い、課題を明確にして、他県・他機関の先行事例を知り、顔の見える連携の機会となった。次のステップである“Change”への原動力としてほしい。」と閉会のあいさつがあり、地域相談支援フォーラムin長崎、2日間の全プログラムが終了しました。

また、会場にはNHK長崎支局、長崎新聞の取材が入り、NHKでは2月1日夕方のローカル番組で講演内容や開催者の狙い等が紹介されたほか、長崎新聞では2日目の発表やグループワークの様子が報道されました。



■ 資料

資料1 「離島におけるがん患者の現状とがん相談専門員としての課題」([PDF:345KB](#))

資料2 「離島がん医療の実際」([PDF:521KB](#))

資料3 「がん医療空白地域の現状～長崎県松浦市」([PDF:327KB](#))

資料4 「小離島における在宅ターミナルケアへの取り組み」([PDF:1.1MB](#))

資料5 「がん治療と離島の課題」([PDF:1.39MB](#))

◀ [平成26年度 地域相談支援フォーラム in 長崎 開催記録\(1日目\)](#)

[平成26年度 地域相談支援フォーラム in 長崎 運営関係者リスト](#) ▶

がんになっても自分らしく イキイキと輝く ～患者のちから～

日時：2015年2月14日（土） 14:00～17:00

会場：琉球大学医学部臨床研究棟 1階大学院セミナー室

第一部：第2回患者会合同企画

【対象】 関心のある方

14:00～ 「治療と仕事の両立」

講師：島尻章子氏 サバイバーナースの会「ぴあナース」

14:30～ 「患者力を身につけよう」

講師：金城隆展氏 琉球大学医学部附属病院地域医療部

15:00～ 患者会の紹介

第二部：がんサロンネットワーク

【対象】 サロン世話人

15:45～17:00 「がんサロンゆいまーる連絡会」（仮称）

県内がんサロンの世話人同士が集い、互いの交流・連携を深め、がん患者とその家族が安心して暮らせる環境づくりを目指す会のプレイベントです。

主催：琉球大学医学部附属病院、沖縄県立中部病院、那覇市立病院

共催：沖縄県がん診療連携協議会相談支援部会

サバイバーナースの会「ぴあナース」、沖縄県婦人科がん患者会宇宙船子宮号、那覇西ひまわりの会
多発性骨髄腫おきなわ患者の会、小児がん経験者の会「Ti-daわらばーむ」

お問い合わせ先：琉球大学医学部附属病院がんセンター TEL:098-895-1368 大久保・上原

沖縄がんサロンネットワークキックオフイベント（報告）

第二部 がんサロンネットワーク「がんサロンゆいまーる連絡会」

時間 : 16:00~17:00

対象 : 患者会やがんサロン世話人、他医療従事者

プログラム : 1. 各サロン紹介 (30分)

- ・開催頻度、内容、参加人数、男女比など

2. 意見交換 (30分)

- ・各サロンに聞いてみたいこと、やってみたいこと

- ・今後のサロン連絡会の開催について

全体司会 : 大久保 (琉大病院 MSW)

参加者 : ピアナースの会 6名、宇宙船子宮号 2名、患者会連合会 2名、

那覇西ひまわりの会 2名、まんま宮古・ゆうかぎの会 兼任者 1名

琉大病院 2名、那覇市立病院 1名、中部病院 1名 計 17名

内容 : 意見交換の場では、課題として、参加者が増えないことや開催場所の確保、広報がうまくできないといった意見が出された。それぞれの患者会がサロン活動も行っているが、意外とサロン同士が互いにどんなことをしているのか知らないこともあり、このような情報交換の場があるといいという意見が多く、次年度も開催していく予定となった。



「がん医療におけるピアサポート」

日時: 9月28日(日) 13:00~17:00

講師: 大松 重宏 氏 (兵庫医科大学 社会福祉学 准教授)

場所: 那覇市立病院 3階講堂

参加費
無料

申込
不要

第一部 那覇がん患者ゆんたく会 5周年記念講演会

●対象 がん患者・家族・関係者、医療従事者等

13:00~ 受付

13:30~14:30 講演「がん患者サロンの現状と課題」

講師: 大松 重宏 氏

第二部 第2回がん相談支援実務者研修会

●対象 医療ソーシャルワーカー、看護師、他医療従事者

14:30~15:00 受付

15:00~15:05 開会挨拶、オリエンテーション

15:05~16:05 講演「がん医療におけるピアサポート」

講師: 大松 重宏 氏

16:05~16:55 グループワーク

16:55~17:00 閉会挨拶、アンケート記載

主催: 沖縄県がん診療連携拠点病院那覇市立病院
沖縄県がん診療連携協議会相談支援部会

共催: 琉球大学医学部附属病院、沖縄県立中部病院
沖縄県医療ソーシャルワーカー協会

【お問い合わせ】

地域がん診療連携拠点病院 那覇市立病院
がん診療連携室 上里

TEL: 098-884-5111 (内線283)

E-mail: ca-link@nch.naha.okinawa.jp

平成26年10月3日

那覇がん患者ゆんたく会5周年記念講演会
「がん患者サロンの現状と課題」報告書

日 時：平成26年9月28日（日）13時30分～14時30分

場 所：那覇市立病院 3階講堂

参加者：参加者27名（アンケート回収23名）

一 般：10名、 医療従事者：17名（MSW・看護師・医師等）

研修会内容

「がん患者サロンの現状と課題」

対象者：患者・家族、一般市民、医療従事者等

講 師：大松 重宏先生（兵庫医科大学社会福祉学 准教授）

主 催：地域がん診療連携拠点病院那覇市立病院

後援：一般社団法人沖縄県がん患者会連合会、沖縄県がん診療連携協議会相談支援部会
沖縄県医療ソーシャルワーカー協会

アンケート結果・別紙



平成26年度「がん患者サロンの現状と課題」アンケート集計結果

平成26年9月28日

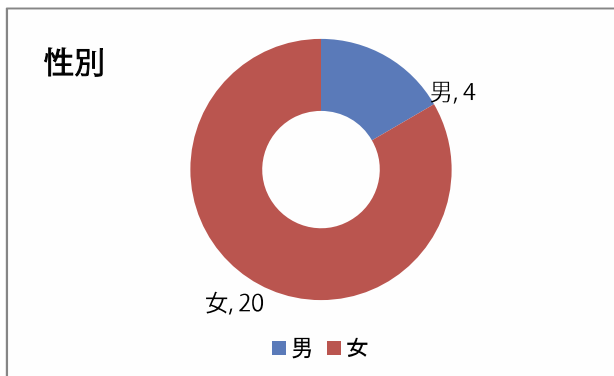
参加者27名（アンケート回収24名：回収率 89%）

一般：10名

医療従事者：17名（MSW・看護師・医師）

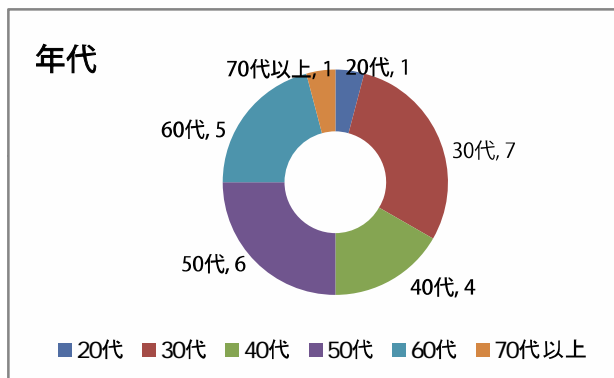
1. 性別

男	4
女	20



2. 年代

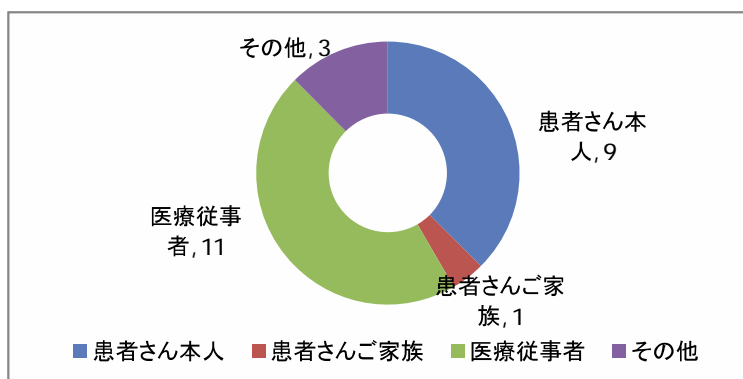
20代	1
30代	7
40代	4
50代	6
60代	5
70代以上	1



3. あなた自身について

患者さん本人	9
患者さんご家族	1
医療従事者	11
その他	3

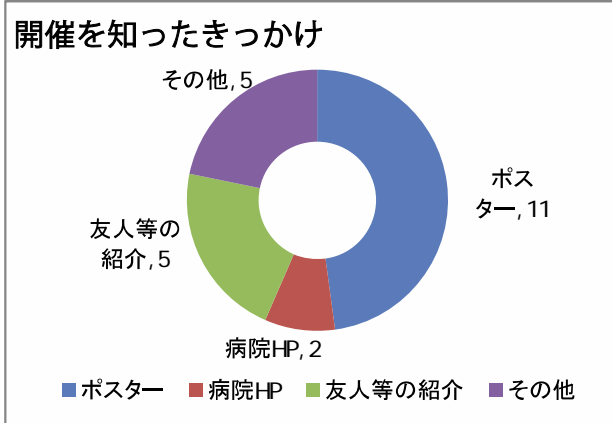
その他：学生 1



4. 講演会の開催を何で知りましたか

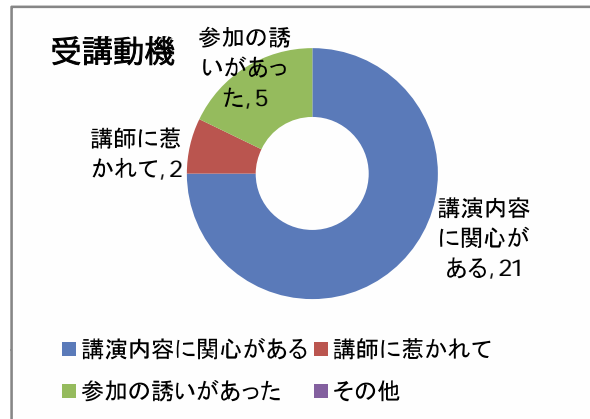
ポスター	11
病院HP	2
友人等の紹介	5
その他	5

その他：教員の紹介



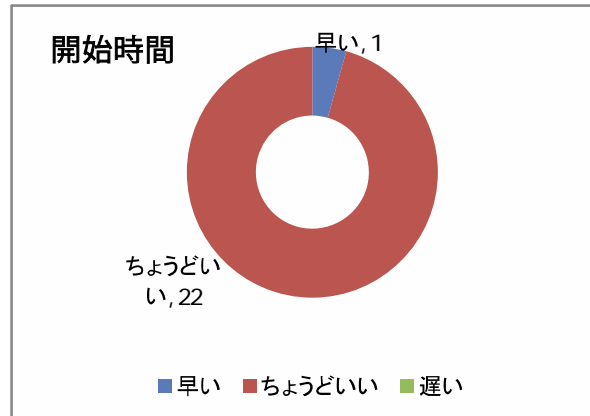
5. 講演会を受講したきっかけ

講演内容に関心がある	21
講師に惹かれて	2
参加の誘いがあった	5
その他	0



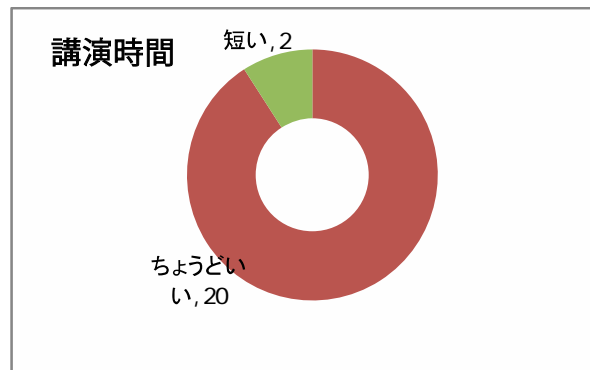
6. 講演時間について：開始時間

早い	1
ちょうどいい	22
遅い	0



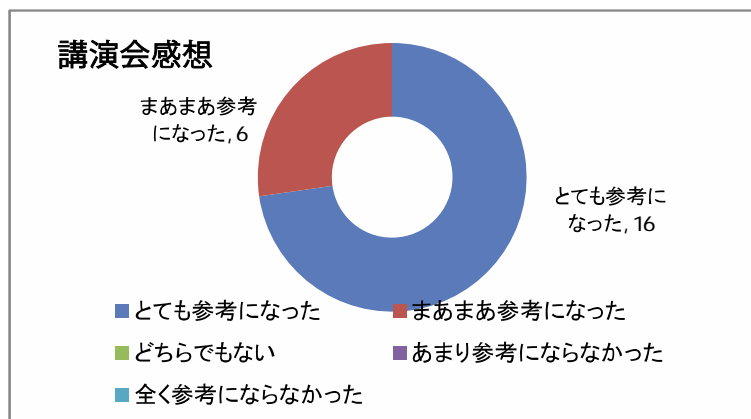
6. 講演時間について：講演時間

長い	0
ちょうどいい	20
短い	2



7. 講演会感想

とても参考になった	16
まあまあ参考になった	6
どちらでもない	0
あまり参考にならなかった	0
全く参考にならなかった	0



8. 本日の講演会に関するご感想や今後開催してほしいテーマがあればお願いします。

- ・患者会がマンネリ化しないための運営方法を伝授していただきました。とても参考になりました。
- ・院内で乳がんの患者会orサロンをつくりたいという声があがっているのでとても参考になりました。
- ・身近な内容でとても役に立ちました。また、先生にお願いいたします。
- ・がんサロンの現状と運営について、幅広くわかりやすい内容でした。講演会の後に患者・家族の交流会があれば情報交換もできていいのではと思います。
- ・患者サロンや単なるお茶会、患者会の違いを改めて考えさせられた。ピアサポートを活かす仕組みなど、考えていきたいと感じました。
- ・沖縄県だけでなく全国的にも参加者が少ない、地域格差があることを知れた。参加のきっかけ、第1歩が難しい。
- ・「今困っている」患者・家族の医療費や生活費の金銭的な負担の問題（課題）について講演していただきたい。
- ・ネットワークの再構築・・・ヒントいただきました。様々な会の情報収集をしていきたいと思います。
- ・もう少し詳しく知りたかった。全国の活動を知りたい。
患者さん、市民向けであれば場所を考慮した方がいいのでは？公民館とかセンターとか。

平成26年10月3日

がん相談支援員実務者研修会
「がん医療におけるピアサポート」報告書

日 時：平成26年9月28日（日）15時～17時

場 所：那覇市立病院 3階講堂

参加者：参加者20名（アンケート回収20名）

MSW10名、看護師7名、ピアサポーター2名、医師1名）

研修会内容

「がん医療におけるピアサポート」

対象者：がん相談支援員

講 師：大松 重宏先生（兵庫医科大学社会福祉学 准教授）

主 催：地域がん診療連携拠点病院 那覇市立病院

沖縄県がん診療連携協議会 相談支援部会

共催：琉球大学医学部附属病院、沖縄県立中部病院

沖縄県医療ソーシャルワーカー協会

アンケート結果・・・別紙

がん診療連携室 上里（内線283）



平成26年度相談員実務者研修会「がん医療におけるピアサポート」アンケート集計結果

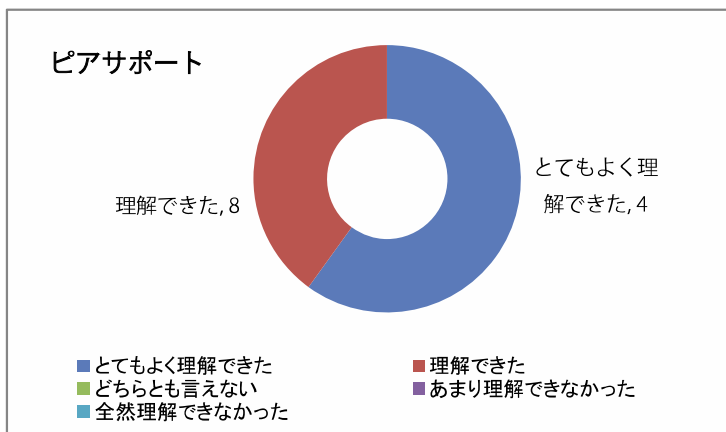
平成26年9月28日

参加者20名（アンケート回収20名：回収率 100%）

（MSW10名、看護師7名、ピアサポーター2名、医師1名）

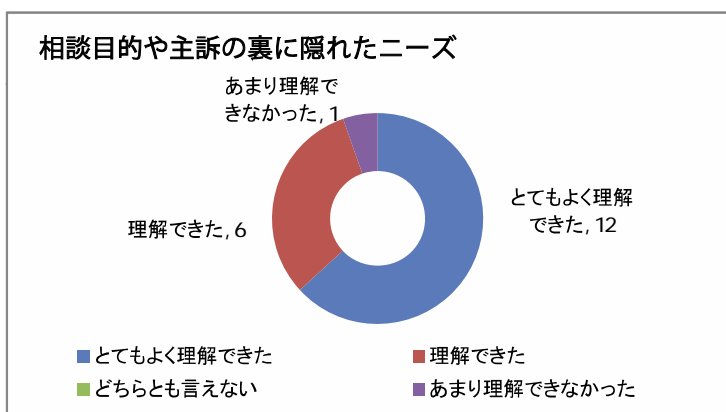
1. ピアサポートについて理解できましたか？

とてもよく理解できた	12
理解できた	8
どちらとも言えない	0
あまり理解できなかった	0
全然理解できなかった	0



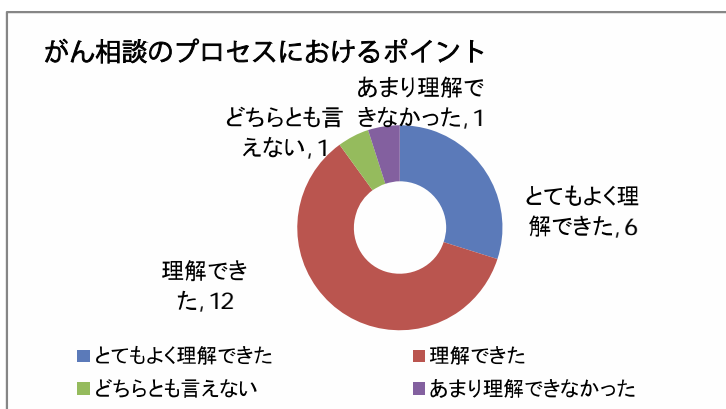
2. 相談目的や主訴の裏に隠れた潜在的ニーズについて理解できましたか？

とてもよく理解できた	12
理解できた	6
どちらとも言えない	0
あまり理解できなかった	1
全然理解できなかった	0



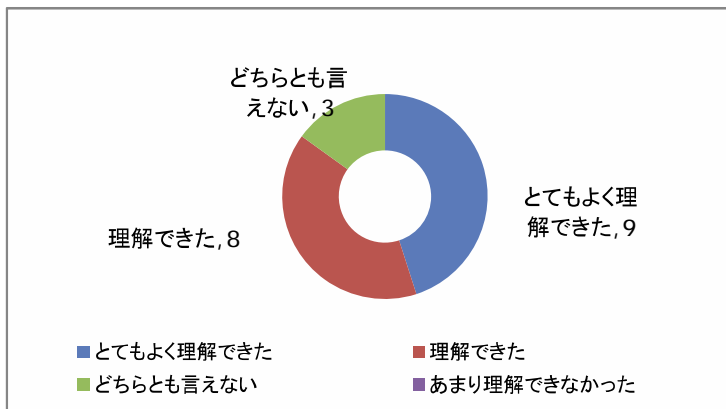
3. がん相談のプロセスにおけるポイントについて理解できましたか？

とてもよく理解できた	6
理解できた	12
どちらとも言えない	1
あまり理解できなかった	1
全然理解できなかった	0



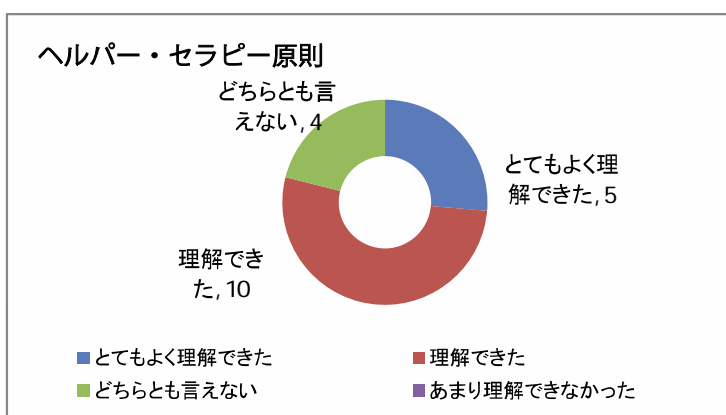
4. がんサバイバーが抱く苦痛を知るとともに、サバイバーが持つ力とソーシャルサポートについて理解できましたか

とてもよく理解できた	9
理解できた	8
どちらとも言えない	3
あまり理解できなかった	0
全然理解できなかった	0



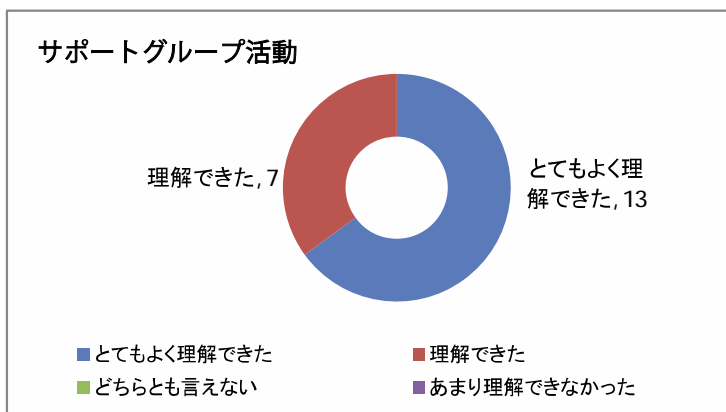
5. 「ヘルパー・セラピー原則」について理解できましたか？

とてもよく理解できた	5
理解できた	10
どちらとも言えない	4
あまり理解できなかった	0
全然理解できなかった	0



6. 医療関係者と患者会等が共同で運営するサポートグループ活動について理解できましたか？

とてもよく理解できた	13
理解できた	7
どちらとも言えない	0
あまり理解できなかった	0
全然理解できなかった	0



7. 受講しての感想や今後開催してほしいテーマがあればお願いします。

- 多くの学びを得ました。ありがとうございます。
- 深めるためにも同じ型で繰り返し学びたい。
- サロン運営する上でどのような役割を持ち、どのように行えばいいかわからないことが多かったが、講演を聞き方向性が見えてきた気がする。わかりやすくとても良かったです。
- ネットワークを作る必要性を感じた。
- 目からウロコの言葉が3点ほどあり考え方やヒントを得られた。
- 各サロンの状況が聞けたので、とても参考になりました。ピアサポートの能力の向上と患者会がマンネリ化しないためのコツを学びました。
- 「ピアサポート」「患者会」「サロン」理解していたつもりが、実は全くわかっていなかったことを理解できました！頭がスッキリしました。職場に戻って伝達したいと思います。
- ピアサポートの意義やSWとして関わるときの視点などを考えることができた。
- お互いの状況や課題・問題の共有ができサロンでの活動がわかると患者さんへ紹介しやすい。患者会サロンネットワークを作りましょう！
- 患者会に実際参加し、どのような話がされているのかをみてみたいと思いました。

平成 26 年度 第 3 回 がん相談支援員実務者研修会

研修会概要

開催日時：平成 26 年 10 月 30 日（木）18：00～20：00

テーマ：在宅医療の現状と課題

講師：沖縄県立中部病院 地域ケア科医師 田仲 斉
 沖縄県立中部病院 地域連携室MSW 喜舎場 利恵
 訪問看護ステーション青空 所長 下地 節子

内容：パネルディスカッション

主催：沖縄県立中部病院
 共催：沖縄県がん診療連携協議会相談支援部会
 独立行政法人那覇市立病院、琉球大学医学部附属病院
 沖縄県医療ソーシャルワーカー協会

場所：沖縄県立中部病院

参加者数：52 人

研修会参加者 内訳

がん診療機能別	人数
がん診療拠点病院	23 人
その他の医療機関	24 人
医療機関以外	5 人
合計	52 人

職種	人数
MSW	11 人
看護師	33 人
医師	6 人
ケアマネジャー	1 人
その他	1 人
合計	52 人

研修会の様子

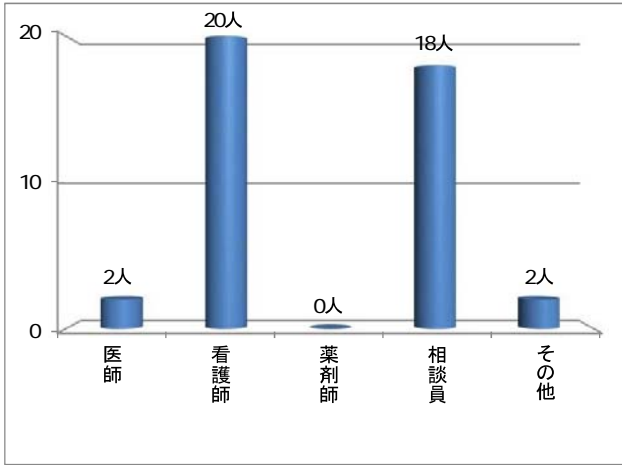


平成26年度 沖縄県がん相談支援員実務者研修会
「在宅医療の現状と課題」参加者名簿

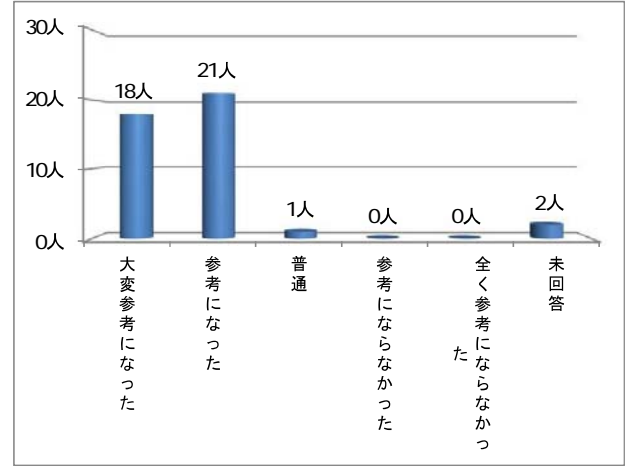
アンケート集計結果

平成26年10月30日(木) 18:00～
[参加者 52名、アンケート回答者 42名]
アンケート回収率 80.8%

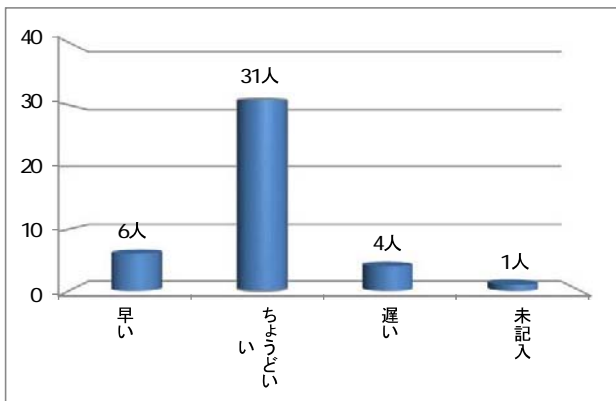
Q1. あなたのご職業を教えてください。



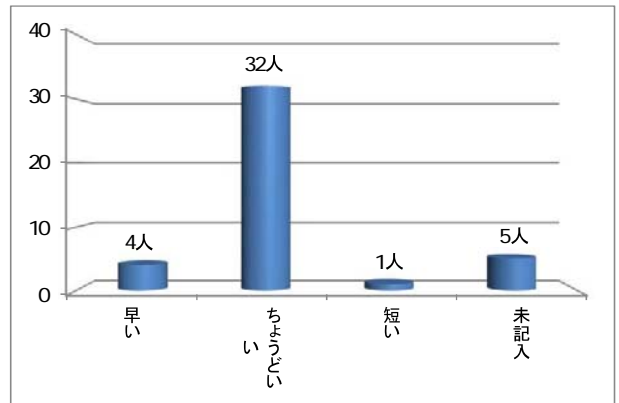
Q2. 本日の研修会は参考になりましたか。



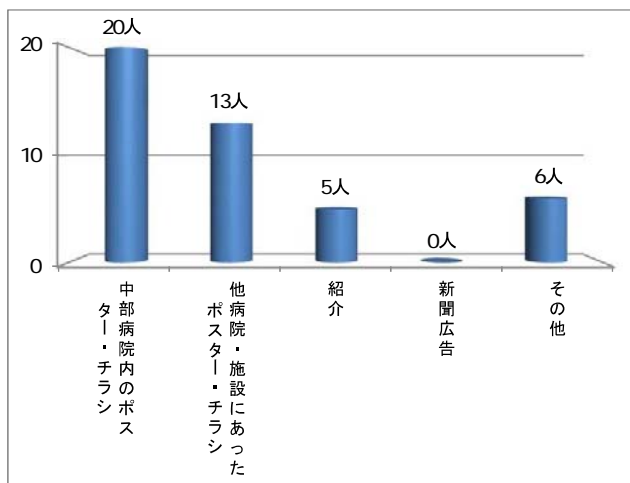
Q3-1 開始時間はいかがでしたか。



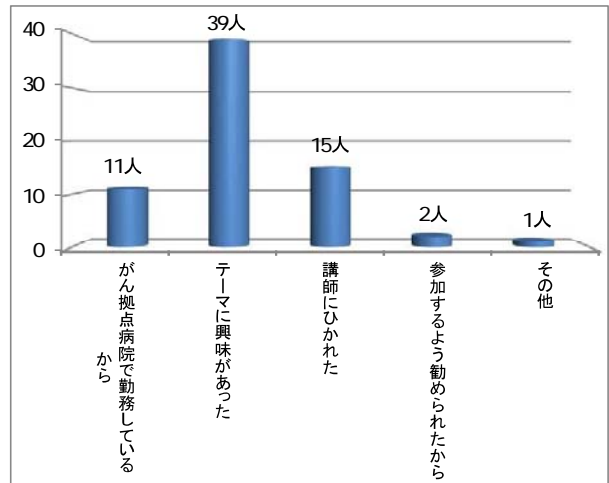
Q3-2 講演時間はいかがでしたか。



Q4. 今回の研修会は何でお知りになりましたか。



Q5. 今回の講演会に参加しようと思った動機を教えてください。
(複数選択可)



平成26年度 沖縄県がん相談支援員実務者研修会
「在宅医療の現状と課題」参加者名簿

アンケート集計結果

平成26年10月30日(木) 18:00～
[参加者 52名、アンケート回答者 42名]
アンケート回収率 80.8%

Q6. 今後、行って欲しいテーマがあれば教えてください。

- 急性期HPと在宅の早期の連携方法について
- 在宅医療Ⅱ
- 在宅医療を行うために課題となっている、多種職との連携や地域の支援者との関わりなど。地域包括支援についてなど。
- 今回のように、利用者の立場に立って、在宅医療を成功させる具体的な方法を、事例を通して報告して頂けると周知できていくと思われます。

平成26年度 沖縄県がん相談支援員実務者研修会
「在宅医療の現状と課題」参加者名簿

アンケート集計結果

平成26年10月30日(木) 18:00～
[参加者 52名、アンケート回答者 42名]
アンケート回収率 80.8%

Q7. 本日の講演会に関するご質問、ご意見、ご感想をお聞かせ下さい。

- ・ 訪問看護の下地さんのプレゼンテーションが特に素晴らしかった。実際の例を用いながらどのような医療的介入、看護を行ったかが目に浮かぶようだった。素晴らしい講演会を開催していただきありがとうございました。
- ・ ガン拠点病院である以上、必要なことだと思います。又、中部病院でも一人暮らしである患者の最期を看取っていく病棟があればいいと思います。
- ・ 症例にはとても興味を持って聞くことができました。訪問看護師はオールマイティーな視野と知識・技術が必要だとあらためて実感しました。
- ・ 在宅にとっても興味があったのでとてもよかったです。
- ・ クーラーが少し寒いです。
- ・ 中部病院で地域ケアへの取り組みをされていることがわかり、良かったと思いました。
- ・ とても有意義な内容でした。
- ・ 参考になりました。ありがとうございました。
- ・ 皆さん各々専門領域からの講演ありがとうございます。日々患者さんの望む療養の場を提供していきたいと考えてます。
- ・ 内容も理解しやすく、現場の様子が見えるようで良かった。病棟と訪問との連携についても是非お話を伺いたいと思います。
- ・ 各支援者の関わりが見えてとても参考になりました。患者さんやご家族によりよい支援ができるよう、色々考えることが今後必要だと感じました。
- ・ MSWの実際の事例がほしか
- ・ 時間が長くなってしまうので平日の夜では難しいかとは思いますが、講演だけでなくワークショップ・グループワークetc・・・ができればよいと思いました。
- ・ 急性期病院でも在宅ホスピス(往診)を実施していることについて、とても素晴らしいと思いました。急性期だからこそできる支援があると感じました。とても理解しやすい内容でした。ありがとうございました。
- ・ とても勉強になりました。急性期病院のMSWをしているのですが、喜舎場さんや下地さん、田仲先生の、それぞれの立場で感じている事や抱えている課題が聞け、とてもよかったです。日頃の業務で意識して、取り組んでいきたいです。
- ・ ありがとうございました。

平成26年度 沖縄県がん相談支援員実務者研修会
テーマ

「在宅医療の現状と課題」

日時: 10月30日(木) 18:00 ~ 20:00

場所: 県立中部病院 本館2階 会議室

対象: 医療ソーシャルワーカー 看護師 他医療従事者

演題1 「当院における在宅医療の現状と課題」
沖縄県立中部病院 地域ケア科医師 田仲 斉

演題2 「医療ソーシャルワーカーの立場から」
沖縄県立中部病院 地域連携室MSW 喜舎場 利恵

演題3 「訪問看護ステーションの立場から」
訪問看護ステーション青空 所長 下地 節子

☆ **事前申し込み不要** **参加費: 無料**

主催: 沖縄県がん診療連携拠点病院 沖縄県立中部病院

沖縄県がん診療連携協議会相談支援部会

共催: 琉球大学附属病院 那覇市立病院

【お問い合わせ】

県立中部病院がん相談支援センター

TEL: 098-973-4111 (内線 3232)

金城・神谷まで